



今月は、初日の出を望むのに最適のスポット、小嵐山、大観峰、荻岳にある文学碑をご紹介します。

取材協力 中村道則氏

■阿蘇惟治 (1808~1877)

阿蘇神社大宮司。勤王家。国学者。惟治氏は、阿蘇神社の造営に尽力しながら国防にも熱意を持ち、1853年に黒船来航後の海防問題に対して藩当局に上書を提出しています。外国の大艦を海戦で破る策を考えるなど、大変人望のある勇ましい人物であったようです。

■徳富蘇峰 (1863~1957)

評論家。水俣市生まれ。文豪徳富蘆花の兄。徳富蘇峰は、西町の蔵原惟昶の案内で、大正11年5月17日垂玉より阿蘇に登り火口を見学。坊中へ下り、内牧塘下温泉に泊まり、翌日、遠見ヶ鼻に登り、阿蘇五岳を前に阿蘇谷を見て「まるでパノラマだ」と激賞。蔵原氏らの要望により蘇峰が「大観峰」と命名しました。

この歌は、「この地を大変好んでいる。景勝が京都の嵐山によく似ていることを和歌にのせその意を述べた」という意味で、「小嵐山」の名の起りと言われています。

本島崇廣、高宮守廣建立

\*1865年、栗林範吉、田嶋敬信、\*自筆

歌碑所在地

中通小嵐山

「月花にあはれさ賀野のおもかげを  
うつすやこのさあらしの山」

歌碑

阿蘇 惟治



▲小嵐山 阿蘇惟治歌碑

詩碑

徳富 蘇峰

「屏列群峰作外輪 天成畫本此披陳  
一邱一壑何須説 請看蘇山面目眞  
昭和乙亥春 蘇峰菅原正敬」

詩碑所在地 大観峰

\*自筆

\*昭和33年立石幸夫、河崎義夫、

野上進、伊豆富人建立

この碑に刻まれた漢詩は、阿蘇谷は峰々連なり、びょうぶを立て並べたようにして、外輪（カルデラ）を作っている。一つの岳、谷、崖など・・・絵に描いたような自然が作った大パノラマを見ようだ・・・と解釈されています。



▲大観峰 徳富蘇峰の詩碑(手前)と吉井勇の歌碑(奥)

■高田保馬

(1883~1972)

社会経済学者。文学博士。京都大・大阪大名誉教授歴任。文化功労者。佐賀県出身。昭和39年、高田氏が宮中御詠歌会の召人の栄を担ったとき詠進されたのがこの波野・阿蘇ゆかりの歌でした。

\*昭和45年高田保馬先生歌碑建設会建立 \*自筆

歌碑所在地

中江 荻岳山頂

「白々と末はみそらの雲に入る

波野の原のほすすきのむれ」

歌碑

高田 保馬



▲荻岳 高田保馬歌碑